

キナウル語の名詞句構造と修飾構造*

高橋 慶治

1. はじめに

本稿の目的は、キナウル語の名詞句構造と修飾構造について記述し、とくに連体修飾の特徴からキナウル語の形容詞の性質を探るものである。

1.1. キナウル語の概要

キナウル語は、チベット・ビルマ語派西ヒマラヤ諸語に属する言語の一つである。西ヒマラヤ諸語は、インド西北部のヒマーチャル・プラデシュ州およびウッタラカンド州に分布する言語群であり、キナウル語はその西部グループであるキナウル語群に属し、ヒマーチャル・プラデシュ州キナウル地区で話されている。人口は5万人程度であるが、他のインドの少数民族と同様、若い世代で主としてヒンディー語を使うようになってきており、今後、母語話者が激減する可能性がある。

方言的には、大きく上キナウル方言と下キナウル方言に分けることができる。上キナウル方言はチベット語からの借用が、下キナウル方言はヒンディー語からの借用が多いと言える。方言間の差は比較的小さいようであるが、詳細は今後の調査に待たなければならない。

キナウル語の基本語順は、SOV/AN である。また、格標識が名詞に後置されるか、または名詞の末尾に接辞として付加される¹。動詞は、代名詞由来とされる主語人称接辞のほか目的語人称接辞を取る。ただし、目的語人称接辞は1, 2人称同形である。

* 本稿は、第17回ヒマラヤ諸語シンポジウム(2011年9月、神戸市外国語大学)と、京都大学人文科学研究所で行われた研究会(2013年12月1日)で発表した内容に加筆、また大幅に修正を加えたものである。発表において有益なコメントをくださった方々に感謝したい。また、筆者に根気よくキナウル語を教え続けてくれるRavinder Singh Negi氏と、つねに筆者を暖かく迎えてくれる彼の家族に心からの感謝をしたい。この研究は、文部科学省から給付された科学研究費補助金(C)(2011-13年度、キナウル語の連体修飾についての研究)とくに修飾語の形態的側面からの分析、#23520514)の援助を受けたものである。ここに記して感謝の意を表する。

¹ 格標識を接辞と見るか接語と見るかは、意見がわかれるところである。最近では接語と見る傾向にあるように思われるが、本稿では基本的に接辞としている。一般に接語と見る理由の一つとして、名詞句の末尾に付くことがあげられる。名詞が名詞句の末尾ではない位置にある場合、格助詞はさまざまな品詞に付く可能性があり、接語と見ることが適切であると考えられているようである。しかし、'the queen of England's hat' という例が示すように、接尾辞が句に付加される例がある。また、語と言えないような形式が名詞句末尾に付いている例を見ると、それを「接語」と呼ぶことには抵抗を覚える。語が統語論的単位、接辞が形態論的単位とすっきり区別できるのであれば事は単純であるが、言語はつねに変化の中にあり、中間的なものがありうるのだらう。接語が、独立した語から接辞への文法化の過程の一段階と考えるなら、接語に幅があると考えられると同時に、接辞らしい接辞から接辞らしくない接辞まで幅があると考えることもできるのではないだろうか。

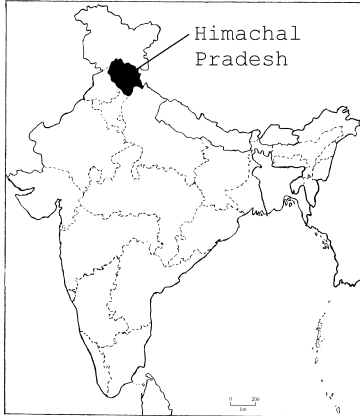


図1 インド

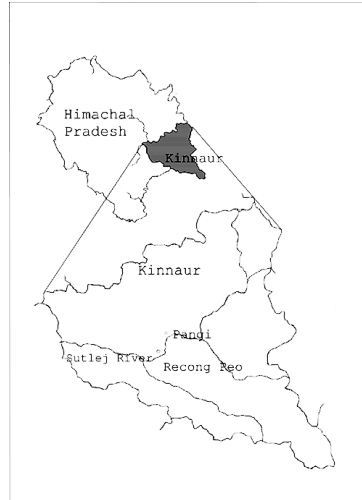


図2 ヒマチャル・プラデシュ州とキナウル地区

1.2. キナウル語の名詞句と修飾構造

名詞は、文の主語や目的語になる。キナウル語の名詞句は、基本的に次の語順を取る。

(1) (Dem +) (Modifier +) Noun

ここで、‘Dem’は指示詞や所有代名詞である。基本的には、名詞句の最初に置かれる。‘Modifier’は、数詞と形容詞などの修飾要素である。また、形容詞句のような長い修飾要素であることもある。‘Noun’は、名詞句の末尾に置かれる。また、名詞句は指示詞や修飾要素なしの名詞だけで構成されることもある。上記のように、格標識は名詞句に後続する。

キナウル語では、形容詞は名詞に前置され、形容詞にも修飾される名詞にもとくに接辞を伴わずに修飾される。ただし、動詞や名詞が後続の名詞を修飾する場合は、何らかの接尾辞を伴う。

その接辞の内、*-tseyā*と*-seyā*は、基本的に前者が動詞に、後者が名詞に付加される。これらの接尾辞の使用は動詞、形容詞、名詞の連続性を示唆していると思われる。本稿の目的は、その連続性を明らかにすることである。

キナウル語では動詞自体が修飾のための形式を取る場合と、動詞が時制や主語人称接辞を取った上で構成する場合があります。筆者は、後者の構造を関係節と呼んでいる。後者は名詞句に含まれていないと考えられるため、本稿は、関係節を扱わない。キナウル語の関係節については、いずれ別稿を用意する。

2. 名詞句構造

キナウル語の名詞句は前節で示したとおりである。以下にその例を示す。

(2) は、名詞のみで名詞句が構成され、目的語として機能している。

- (2) *gi.s kinū kitāb red.a.k*
 1PRN:SG.INS 2PRN:DAT book:ABS sell.PT.1s

‘I sold the book to you.’

この例では、*kitāb* が、指示詞や形容詞だけではなく、格標識も伴っていない。むしろ、指示詞や形容詞を伴っていない名詞が格標識を伴うことはある²。

(3) は、名詞に数詞が先行する例である。名詞が複数形になっているが、複数であることが明らかである場合は（この例では、2以上の数を表わす数詞が付いている）、複数形にする必要はない³。

- (3) *rīnkū diñ niš kim.ā tod.ts*
 PRN place two house.PL exist.GRD

‘Rinku has two houses.’

次の例では、形容詞が名詞を修飾している。形容詞は名詞に先行する。

- (4) a. *nugō tsoik diñ dam zōlā dū*
 3PRN:PL all place good bag exist

‘They have a good bag with each of them.’

- b. *gi.s tēg bō^hañ.u paš.ō runiñ p^hikyā.k*
 1PRN:SG.INS big tree.GEN side.LOC stone throw:PT.1s

‘I threw a stone toward the big tree.’

この例からわかるように形容詞は、連体修飾を示す特別な形を持っているわけではなく、その語幹が直接名詞に先行して名詞を修飾する。

なお、(4b) では、当該の名詞句が属格を伴って、後続の名詞 *paš* を修飾する形になっている。

次例は指示詞と名詞の例である。指示詞は名詞に先行する。

² キナウル語は、他動詞文で能格的な格標示を行う。高橋（2010）を参照。したがって、他動詞の目的語と自動詞の主語は同じ形式、すなわち絶対格であるが、本稿では、これ以降の逐語訳で絶対格であることは示さない。

³ ちなみに、キナウル語に双数という概念はあるが、少なくともバンギ方言では、代名詞が双数形を持っているだけで、名詞にも動詞にも双数を表わす形式はない。

- (5) *ki ju pitañ.ū kin tsoī zōr šešē stug.m.ā.lī*
 2PRN:SG this door.DAT 2PRN:SG:GEN all strength send:PF push.INF.COND.even
ju tērañ.ī ma.dwañ.ts
 this when.EMPH NEG.open.GRD

‘If you push this door with all your efforts, it never opens.’

指示詞も連体修飾のための形式を持っているわけではない。同じ形のまま、名詞的に使われることもある⁴。

次の例は、名詞に所有代名詞が先行している例である。所有代名詞は、上のパラダイムでは、指示詞と同じスロットに入っていると考えられる。

- (6) *gi.s kin bal.ū tʰis.č.e.k*
 1PRN:SG.INS 2PRN:GEN head.DAT hit.1-2o.PT.1s

‘I hit your head.’

ここでは、名詞に格標識が付加されている。キナウル語では、名詞句末に名詞が現れるので、格標識は基本的に名詞に付加される。

(7)は、指示詞と数詞が名詞を修飾する例である。

- (7) a. *ju niš kotʰa.gā rug.ši.d.tseyā dū, irwañ.seyā ma.dū*
 this two story.PL resemble.MDL.GRD.ATTR COP same.ATTR NEG.COP

‘These two stories resemble each other, but not same.’

- b. *ju niš pen.ā airwañ.seyā (dū)*
 this two pen.PL different.ATTR COP

‘These two pens are different.’

- c. *ju niš.u komō hadʹseyā bergā lamas dū*
 this two.GEN inside which stick long COP

‘Which is longer, this stick or that?’

数詞も名詞に前置されれば、その名詞が表わすものがその数だけあることを表す。(7c)は、名詞句内に名詞がない例である。*niš*が名詞的に「2つのもの」という意味となり、属格標識を取っている。

次例は、指示詞と形容詞が名詞に先行する例である。

⁴ *ju* が単体で用いられた場合は、「これ」の意味である。ただし、「これの」のように属格の意味の場合は、*jā* と母音が長くなる。

- (8) *gi.s aŋ zwani.ō ju tēg rim piš.šid*
 IPRN:SG:INS IPRN:SG:GEN young_day.LOC this big field cultivate.DPT
 ‘I cultivated this big field in my young days.’

次の例では、数詞と形容詞が名詞に先行している。

- (9) *niš tēg runiñ.ā solok.ō jabjab du.ē*
 two big rock.PL road.LOC fall_down:PF COP.PT
 ‘Two big stones fell on the road.’

次の例では、指示詞と数詞、形容詞が名詞句内に生起している。また、形容詞は複数現われている。

- (10) *orč^hē ju nā tēg šāgī botol.e.nū p^hikyā.ñ*
 please this five big empty bottle.PL.DAT throw_away.2s:SG
 ‘Please throw away these five big empty bottles.’

複数の修飾語が一つの名詞句内に生起する場合、修飾語の語順には制限がある。*nā, tēg, šāgī* の語順は6種のパターンがありうるが、上の語順の他に許されるのは、形容詞の語順を入れ換えた *nā šāgī tēg* だけである⁵。

- (11) *id lamas yañzē aŋgrēz ts^hetsas bid.tū*
 one tall old_lady English lady come.PR
 ‘Here comes a tall old English lady.’

上の *lamas, yañzē, aŋgrēz* の3語で構成される語順は、上の例の他に *lamas aŋgrēz yañzē, yañzē lamas aŋgrēz* の2種のみであり、*yañzē* と *aŋgrēz* が上の原則に従っていない。ここで言えることは、*lamas* が *aŋgrēz* に先行することが条件になっているということである⁶。

英語などで形容詞句内部で形容詞に配列順序があることが知られているが⁷、キナウル語でも、おおよそ同じような語順で形容詞が配列されるようである。ただし、キナウル語の名詞句内での形容詞の配列順序については、さらに調査が必要である。

⁵ 数詞は修飾語の中でもっとも前に置かれるのが普通である。しかし、数詞がこの位置に固定されているわけではなく、形容詞より後ろに現れることもある。ただし、その条件は今のところ不明である。

⁶ ただし、*aŋgrēz* は ‘foreign’ という意味でもありうるので、固有形容詞と見るべきではないかもしれない。

⁷ 安井・秋山・中村 (1976: 138) では、「限定詞<同定の形容詞<強意の形容詞<特性記述形容詞<分類形容詞<名詞」などの順番が示されている。ただし、安井他 (1976: 137) で、「配列順序を決定する一定の明確な原則というものはないように思われる」としている。

3. 名詞修飾：-seyā と -tseyā の分布

前節では、名詞句内の要素の語順を見た。本節では、名詞を修飾する要素として、形容詞、名詞、動詞の分布を見る。

前節で見たように、キナウル語では、修飾語は名詞に前置される。それが修飾要素であるかどうかは形態的には判別できない。しかし、修飾要素であることを明らかにする2種の接尾辞がある。以下では、この接尾辞を含め、キナウル語の修飾構造についてさらに観察する。

3.1. 形容詞による名詞修飾

キナウル語の形容詞の特徴として、次の点が考えられる。

1. 第2節で見たように、形容詞は被修飾語に前置される。
2. とくに連体修飾用の形式があるわけではない。
3. 比較級、最上級などの変化はない。比較の基準を示せば、比較の意味を表す。
4. いくつかの点で、名詞的であると言える。

Dixon (2004) は、あらゆる言語に形容詞という品詞クラスがあると主張しているが⁸、キナウル語の形容詞の場合は、名詞的であるとはいえ、名詞そのものとは分布が異なるため、形容詞という品詞クラスがあると考えてよい⁹。

第2節で見たように、形容詞は、そのままの形で名詞を修飾する。つまり、連体修飾用の特別な形式があるわけではない。第2節ですでにその点を確認しているので、本節では接尾辞 -seyā¹⁰ が付加されている例を見る。

(12) では、「冷たい」を意味する形容詞 *lis/lisk* に接尾辞 -seyā が付いている。

- (12) *lis.seyā/lisk.seyā* *tī*
 cold.ATTR/cold.ATTR water
 ‘cold water’

lis と *lisk* は、末尾の -k の有無にかかわらず同じ意味で用いられる。-k の意味は今のところ明らかではないが、名詞化接辞である可能性があると思われる¹¹。次

⁸ ‘I suggest that there are always some grammatical criteria—sometimes rather subtle—for distinguishing the adjective class from other word classes.’ (Dixon 2004: 1) また、‘... all languages have a distinguishable adjective class.’ (Dixon 2004: 9)

⁹ ただし、そのことによって筆者が、Dixon と同様、あらゆる言語に形容詞という品詞クラスがありうると考えているわけではない。

¹⁰ -seyā と、後述する -tseyā は形式がよく似ているので、語源を同じくする可能性がある。動名詞を作る接尾辞 -ts または -d が付いた上に -seyā が付加されれば、発音が -tseyā に変化することは容易に想像できる。しかし、今のところインフォーマントは *V-ts/d-seyā* というように発音することを容認しないため、母語話者の意識としてはこのような接辞の組み合わせで成立するものではない。ただ、もしこの組み合わせで成立しているなら、-ts/-d という接尾辞で名詞化された動詞に -seyā が付くという説明が可能である。なお、この接辞とチベット語の *seyaa* の機能と形式が似ているが、キナウル語では -sē が女性形として用いられることがある。cf. 例 (19)

¹¹ この語末 -k がある場合とない場合について、筆者は、かつて、たんに音節末の子音連続が単純化したかどうか

例も、形容詞 *ušk* に *-seyā* が付加されている。

- (13) *gi* *ušk.seyā* *kim.ō* *tōši.d*
 1PRN:SG old.ATTR house.LOC live.GRD
 ‘I live in an old house.’

実際には、*-seyā* が付いている例と付いていない例では意味に違いがある。(14)では、*em* はたんに「美味しい」と言っているだけだが、*emseyā* と言った場合には、「美味しい方の」という意味になる。

- (14) *ki* *hōtol.ō* *wāl* *em/em.seyā/*em.tseyā* *k'aū*
 2PRN:SG restaurant.LOC very delicious/delicious.ATTR/delicious.ATTR food

zā.m *han.ts*
 eat.INF be_able.GRD
 ‘You can eat very delicious meal at the restaurant.’

なお、形容詞には、上で *emtseyā* が容認されないように、*-tseyā* は付加できない¹²。次の例でも、*damseyā* は「よい方」という意味である。

- (15) *gi.s* *jū kā* *dam/dam.seyā* *gasā* *zog.i.m* *gyā.to.k*
 1PRN:SG.INS this than good/good.ATTR clothe buy.LV.INF want.FUT.1s
 ‘I want to buy clothes better than this.’

結果として、形容詞に *-seyā* が付加された場合は、比較級の意味になりうる。ただし、構文自体が比較を表している場合は、あえて *-seyā* を使わなくてもよい。例(15)では、比較の基準が示されているので、*-seyā* を取っていない *dam* も比較の意味を表す。

3.2. *-seyā* を伴う名詞の名詞修飾

本節では、キナウル語の形容詞が、名詞と似た性質をもつことを確認するため、名詞による名詞修飾を確認しておく。

(16)は、名詞が名詞を修飾する際のもっとも基本的なやり方と考えられる、属格による修飾である。(6)の所有代名詞と同様、名詞に先行して所有格名詞が置かれる¹³。

の違いであると考えたが、その後の分析の結果、何らかの（文法的な）意味を持つ形態素であると考えようになっている。ただし、その機能はじゅうぶんに明らかであるとは言えない。いくつかの用例から、名詞化接辞の可能性を考えている。

¹² ただし、ごく一部の形容詞に *-tseyā* が付加される場合がある。少なくとも、さらにその一部の形容詞は動詞的に使われうるものである。このような説明のできない形容詞はさらに限られている。

¹³ 属格が、所有以外のさまざまな意味を持ちうることは他の言語と同じであるが、ここではそのような意味の分析は行わない。

- (16) *rabindar.u kim.ō mē tunī zormyamyā*
 PSN.GEN house.LOC yesterday girl_baby be born:PF
 ‘A girl was born in Ravinder’s house yesterday.’

ただし、このことは修飾語が被修飾語の前に置かれることを確認するだけである。
 -*seyā* は名詞に付加され、付加された名詞と同じ特徴をもつものであるという
 意味を表わす。例 (17) で、(17a) は「髭をたくわえた人」、(17b) は、話者がいく
 つかのロウソクを比べながら、「これにしておく」と言っている。

- (17) a. *gi.s darī.seyā mī tʰaŋ.a.k*
 1PRN:SG.INS beard.ATTR person see.PT.1s
 ‘I saw a bearded man.’
- b. *añū huyū.seyā mumbatī ke.ñ*
 mēDAT this.ATTR candle givē1-2o.2s
 ‘Give me this candle.’

なお、対比のニュアンスなくたんに「このロウソク」と言いたければ
ju mumbatī と言えばよい。

(18) では、*boāseyā* は限定的ではない。これは、「シャールーの父という性質を
 もつ人」という意味で、名詞化された用法である。

- (18) *šālū boā.seyā rabindar.ī dū*
 PSN father.ATTR PSN.EMPH COP
 ‘It is Ravinder who is the Shalu’s father.’

いずれにせよ、-*seyā* は名詞に付加される。

次の例は、-*seyā* ではなく -*sē* が用いられている。これは、被修飾名詞が女性
 である場合、用いられることがある。

- (19) *ramēš rok.krā.sē tʰetsas dam tsal.ts*
 PSN black.hair.ATTR:FEM lady good think.GRD
 ‘Ramesh likes a dark-haired girl.’

前節で見たように、形容詞が -*seyā* を伴うことがある。形容詞は、普通 -*tseyā*
 を取ることはできない。-*seyā* を伴う形容詞は、比較級のような意味をもつが、
 キナウル語では、形容詞は、そのままの形で比較級の意味を示すことができる。
 形容詞が -*seyā* を取る場合、形容詞が表わす性質をもついくつかのものの中から
 いずれかを選ぶというある種の選択を意味している。この意味は、名詞が -*seyā*

を取る場合の意味と類似することを確認しておきたい。

3.3. 動詞による名詞修飾：-tseyā

動詞は形容詞と異なり，通常名詞に直接前置してもその名詞を修飾しているとは言えない。動詞が名詞を修飾するためには，何らかの形式を取る必要がある。本節では，接尾辞 -tseyā の分布を調べる。

上で述べたように，-tseyā は，動詞が名詞を修飾する場合，英語の分詞のように動詞に付加される。(20) では，-tseyā が動詞 *lañ-* ‘wait’ に付加されて，名詞 *mī* ‘person’ を修飾する。したがって，この構造は「待っている人」‘the waiting person’，「(誰かを) 待つ人」‘the person who waits for (somebody)’ を表わす。この例は，また，動詞は名詞を修飾する場合，-seyā を取ることができないことを示す。

- (20) *tašī.piñ lañ.tseyā/*lañ.seyā mī rabindar dū*
 PSN.DAT wait.ATTR/wait.ATTR person PSN COP
 ‘The person who is waiting for Tashi is Ravinder.’

例 (21) では，-tseyā が動詞 *krab-* ‘cry’ に付加されている。この動詞は否定辞 *ma-* を伴って名詞 *č^hañ* ‘child’ を修飾する。

- (21) *hunak.stañ ma.krab.tseyā/*ma.krab.ši.d.tseyā č^hañ hunā krab.udū*
 now.till NEG.CTY.ATTR/NEG.CTY.MDL.GRD.ATTR boy now cry.PR
 ‘The boy who didn’t cry till now is crying now.’

なお，*makrabšidtseyā* が容認されないのは，中動態接辞 -*ši*¹⁴ が付加されているからである。(22a) は -tseyā が動詞 *sad-* ‘kill’ に付加されて，名詞 *mī* を修飾する。*sašidtseyā* はこの文では許容されない。しかし，(22b) では，*sašidtseyā* が適格であり，*sadtseyā* は不適格である。つまり，中動態接辞 *ši-* は，被修飾名詞が，動詞の意味的目的語の時，挿入される。この点の詳細は，Takahashi (2012) を参照のこと。

- (22) a. *guruḷi.piñ sad.tseyā/*sa.ši.d.tseyā mī čōras du.ē*
 teacher.DAT kill.ATTR/kill.MDL.GRD.ATTR person thief COP.PT
 ‘The person who killed the teacher was the thief.’
 b. *čōras.is sa.ši.d.tseyā/*sad.tseyā mī guruḷi du.ē*
 thief.INS kill.MDL.GRD.ATTR/kill.ATTR person teacher COP.PT
 ‘The person who the thief killed was the teacher.’

¹⁴ この接尾辞については，Takahashi (2012) を参照のこと。

なお、(22a)で、*sad mī*のような *-tseyā* をもたない動詞形式は許されない。もし動詞語幹が接尾辞なしで現れた場合、それは命令形であることを意味する。

また、修飾語としての動詞が中動態接辞 *-si* を取っている場合、動詞の意味上の目的語である例を挙げたが、修飾語としての動詞が自動詞である場合は、その動詞の複数主語であったりする。

- (23) *čā.ši.d.tseyā* *čaṅ.a.nū* *ju* *ran.i.ñ*
 dance.MDL.GRD.ATTR child.PL.DAT this give.LV.2S
 ‘Please give this to the children who are dancing.’

筆者のインフォーマントは、時に接尾辞 *-ši*¹⁵ がこの文脈で過去を表していると言うが、それはつねに正しいわけではない¹⁶。(24)では、主動詞 *legts* がこの状況が習慣的に行われていることを表しており、*ṭigšidtseyā* は *hunā* ‘now’ と共起することができる。したがって、この形式は過去を意味していない。

- (24) *gi.s* *ṭig.ši.d.tseyā*/**ṭig.tseyā* *sunduk* *boā.s* *leg.ts*
 I.INS break.MDL.GRD.ATTR/break.ATTR box father.INS burn.GRD
 ‘Father burns the box which I break.’

しかし、もし ‘(somebody) burned (something)’ を意味する *legaš* が主動詞として使われるなら、*ṭigšidtseyā* は過去であると解釈される。このことは、動詞の修飾形式がそれ自体は時制を持たないことを意味し、それは、主動詞の時制によっている¹⁷。

次は叙述的に使われている例であるが、否定辞が付いても同じく *-tseyā* が用いられる。

- (25) *gi* *torō* *k^hāū* *ma.zād.tseyā* *to.k*, *t^hūlonnā* *torō* *aṅ* *upasrī* *to*
 I today food NEG.eat.ATTR COP.IS because today my fasting COP
 ‘I cannot eat food today, because I am fasting.’

以上見たように、*-tseyā* は動詞に付加されて名詞を修飾する形式を作る。ただし、名詞を修飾せずに叙述的に用いられることもある。

¹⁵ 実際には、本稿は、接尾辞 *-si* の機能を明かにしようとするものではない。しかし、これらの例が示しているのは、*-si* が、被修飾名詞が、修飾する動詞の目的語である場合か、または、動詞の主語名詞が複数である場合に用いられているということである。Takahashi (2012) を参照されたい。

¹⁶ 実は、過去を表わす接尾辞として *-sid* という形式が考えられる。これは、主語人称接辞を伴わない形式であるため、非定形動詞を作る。中動態接辞 *-si* と動名詞接辞の異形態 *-d* が結びついた形と同じであるため紛らわしい。高橋 (準備中) を参照。

¹⁷ *legudū* は、現在進行を意味しているので、この文には不適切である。

3.4. *-tseyā* を伴わない名詞修飾

動詞の修飾形式は、3.3 節で見たように、動詞に *-tseyā* を付加することによって形成される。しかし、実際には、他の動詞形式、完了分詞や動名詞が名詞を修飾することがある。本節では、そのような形式を観察する。

本稿は、キナウル語の動詞形態論を詳細に説明するものではないが、本稿の話題に関わる動詞形式についてやや説明が必要である。キナウル語の動詞は、定形または非定形として生起する。動詞が定形の場合、時制接辞と主語人称接辞を取り、非定形の場合は取らない。非定形は、完了分詞、現在分詞、動名詞、または不定詞を含む¹⁸。動詞の完了分詞と動名詞は *-tseyā* なしで名詞を修飾することができる。しかし、現在分詞は *-tseyā* や *-seyā* を付加することができず、また名詞を修飾することはできない¹⁹。

(26) は、動名詞による修飾の例を示す。接尾辞 *-ts* によって修飾する動詞は、*-ts* が付加された動詞の元の主語である名詞を修飾する。

- (26) a. *šī.ts mī*
 die.GRD person
 ‘dead person’
- b. *sad.ts mī*
 kill.GRD person
 ‘the person who kills (somebody)’

通常、*-ts* も *-tseyā* も名詞を修飾できるが、次に見るように、できない場合もある。その違いについては明らかではない。

- (27) a. *nu ts^har.ts/?ts^har.tseyā gasā ka.ñ*
 that make_dry.GRD/make_dry.ATTR clothes bring:1-2o.2s
 ‘Bring those dried clothes.’
- b. *nu ts^har.ši.d/ts^har.šid.tseyā gasā ka.ñ*
 that make_dry.MDL.GRD/make_dry.MDL.ATTR clothes bring:1-2o.2s
 ‘Bring those dried clothes.’

(28a) は完了分詞（重複形）が名詞を修飾できない例である。また、(28b) は、被修飾名詞が単数の場合に容認度が下がっている。その理由は明らかではない。

¹⁸ これらの形式については詳述しない。完了分詞は動詞語幹の重複または動詞語幹が接尾辞 *-s* を取る。現在分詞は *-ō*、動名詞は *-ts* または *-d*、不定詞は *-m* を取る。定形については、高橋 (2012) を参照のこと。また、非定形については、高橋 (準備中) を参照されたい。

¹⁹ Sharma (1988: 107) は、現在分詞が名詞を修飾することができ、例として *šio mi* ‘dying man’ を挙げている。この Sharma と筆者のデータの違いは、そのインフォーマントの方言の違いによるのかもしれない。

- (28) a. *zāzā mī/k^haū
eat:PF person/food
- b. k^haū zā.ts mī.gā/?mī
food eat.GRD person.PL/person
- ‘the people who eat food’

次に、(29) と (30) は、完了分詞による修飾の例である。(29a) では「死んだ人」、(29b) では「殺された人」という意味になるが、いずれも被修飾名詞の表す人が死んでいる。また、(30) は「沸かされた水」であり、(29)(30) はいずれも、重複形動詞が修飾構造で使われて、被修飾名詞は重複された他動詞の目的語であるか、重複された自動詞の主語である。

- (29) a. šīšī mī
die:PF person
- ‘dead person’
- b. sasā mī
kill:PF person
- ‘killed person’
- (30) skwa.ši.s²⁰ tī
boil.MDL.PF water
- ‘boiled water’

ただし、完了分詞による名詞修飾は、かならずしもすべての動詞で同じように行われるわけではない。今のところ少数の動詞に限られていることがわかっている。たとえば、(28a) は容認されない。したがって、これを一般化できるかどうかは不明である。むしろ、形式的には完了分詞にしる現在分詞にしる、分詞は一般的に名詞修飾に使われないと見るほうが明快である²¹。

3.5. 名詞化接辞に付加される -seyā

(31a) では、mahannigseyā が「(運ぶことが) できない」つまり「重い」を意味している。動詞は、上で見たように動詞語幹に関しては通常 -tseyā をとる。し

²⁰ skwašis の末尾の接尾辞 -s は、重複の異形態である。

²¹ 実のところ、2011～2012年の調査では、完了分詞による名詞修飾が適格であるとされていたが、2014年3月の調査では、上に見られるような例のみが適格であり、他はことごとく不適格となった。筆者は、容認度が高いと判断された時、状態性という観点から説明しようとし、第17回ヒマラヤ諸語シンポジウムでの発表の際、そのように述べた。しかし、本文で述べたように、分詞による名詞修飾は、基本的にはないと考えるのが明快であると言える。では、なぜ一部の動詞で適格になるのかという点については今後の課題である。

かし、接尾辞 *-m* と *-g* をもつ動詞は、名詞を修飾する際、*-seyā* を取る。例 (20) を参照のこと。上で述べたように、*-seyā* は名詞に付加されるので、*mahannig* は名詞化された形式と考えることができる。例 (31b) では、動詞 *huši-* が接尾辞 *-m* と *-g* を取り、それに接尾辞 *-tseyā* ではなく *-seyā* が後続する。

- (31) a. *nu (*wāl) šakčen.seyā dū, nu.s ma.han.n.i.g.seyā*
 that very strong.ATTR COP that.INS NEG.be_able.INF.LV.OBLG.ATTR
runiñ.ā tū.d²²
 rock.PL carry.PT
 ‘He is strong, because he carried heavy rocks.’

- b. *šālū.piñ bārī huši.m.i.g.seyā (dū)*
 PSN.DAT very study.INF.LV.OBLG.ATTR COP
 ‘Shalu has to study much more.’

Sharma (1988: 106) は、*šya* (本稿の *-seyā* と同じものと思われる) を提示し、‘derived adjective’ の形式要素としている。また、Sharma (1988: 171) の */-zea ~ -cea/* (および、*/cya/* という形もあると考えているようである) が *-tseyā* と同じ接尾辞と考えられる。しかし、機能が同じであるようには見えない。さらに分析が必要である。

4. 形容詞の性質

本節では、形容詞の性質として、複数形を持っていること、同定文で繫辞を伴うことを示す。また、上で見たように、接尾辞 *-seyā* を取ることから名詞と同じ性質をもっていることを確認する。

キナウル語の形容詞は、修飾する名詞の複数性と一致して屈折するという点で名詞的な性質をもっている。たとえば、(32) は、同定文の補語として形容詞が現れている例である。この場合、名詞が補語になる場合と同様、繫辞が必要である。さらに (32a) は、主語が複数であることと一致して、形容詞も複数形を取っている。ただし、形容詞が単数形でも複数であることは分かる²³。(33) は修飾語としても複数形になることを示す。

²² この接辞 *-d* はいくつかの母音語幹動詞が3人称過去の時に現れるが、その機能は明らかではない。ここでは、過去の接辞としておくが、キナウル語では、定形動詞に過去を表す接辞はない。

²³ キナウル語で、このように形容詞がかならずしも複数形を取らなくてもよいことは、形容詞が複数形を取ることが文法的であるわけではないことを示していると言える。

- (32) a. *bergā.gā* *zigits.ā/zigits* *dū*
 stick.PL small.PL/small COP

‘The stick are short.’

- b. *ju* *kim* *tēg* *dū*
 this house big COP

‘This house is big.’

- (33) a. *lamas* *bergā*
 long stick

‘a long stick’

- b. *lamā* *berga.gā*
 long:PL stick.PL

‘long sticks’

さらに、3.2節で見たように、形容詞は名詞を修飾する際、名詞に付加することのできる接尾辞 *-seyā* を取ることができる。

ただし、(34)の *listseyā* は、実際には [littseja:] と発音されるが、*lis-* が、*-tseyā* を取っている。

- (34) *lis.tseyā*/**lisk.tseyā* *tī*
 become_cold.ATTR/cold.ATTR water

‘the water which became cold’

しかし、同時に *lishtseyā* は不適格である。このことは、*lis-* が ‘to become cold’ を意味する動詞であり、*lisk* の末尾の *-k* が名詞を作る接辞であることを示唆する。そのため、(34)にあるように、*liskseyā* は適格であるが、*lishtseyā* は適格ではないと考えられる。

ただし、(34)を p. 6 の (12) と比べてみると、後者は *-seyā* が *lis-* にも *lisk* にも付加されることがわかる。つまり、*lis-* は曖昧であり、さらなる研究が必要である²⁴。

²⁴ また、形容詞 *spin* ‘damp’ は、*spinseyā*, *spintseyā*, *spinkseyā*, *spinktseyā* のすべての形式が可能である。*spintseyā* については、歯茎鼻音に歯茎摩擦音が続くため、歯茎閉鎖音が挿入されるという理由が考えられるが、*spin* と *-seyā* の間に休止があっても許容されるようである。いずれにしても、筆者は、*spin* のこれらの形式について適切な理由を得ていない。

5. おわりに

以上の観察を次のようにまとめることができる。名詞と形容詞は名詞修飾で *-seyā* を取る。3.2 節で例を見た。動詞といくつかの形容詞は名詞修飾で *-tseyā* を取る。例は、3.3 節で見た。もちろん、形容詞は、名詞修飾で、接尾辞を取らずに名詞に直接前置することもできる。例は、4 節で見た。最後に、動詞の一部が形容詞と同様、重複形などの形式を取っていれば、*-tseyā* なしで名詞を修飾することができる。3.4 節で例を見た。これらの観察から下の図 3 を書ける。

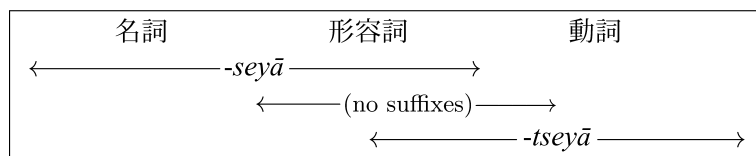


図 3 動詞，形容詞，名詞の連続性

すべての動詞が *-tseyā* を取ることができる。高状態性の動詞の中には、完了分詞の形式になって名詞修飾ができる場合があるが、下の図では示していない (cf. 註 21)。

形容詞は、チベット・ビルマ系言語で名詞的であることも、動詞的であることもある。現代キナウル語では、1 節で述べたように、ほとんどすべての形容詞が名詞的であるが、少なくともいくつかの形容詞は動詞的である。残っている問題の一つは、キナウル語の形容詞が動詞的なものから名詞的なものへ、またはその逆の変化の途上にあるのかどうかということである。しかし、キナウル語について根拠のある議論ができるわけではない。

なお、本稿では、名詞句内の修飾要素としての「関係節」を扱っていない。第 3 節で見たように、動詞による修飾構造を「関係節」と見ていない。これらの修飾構造は動詞を形容詞化して使っていると言ってもよい (実際には名詞化接辞を使うのだから、名詞化していると言うべきだが)。キナウル語では、むしろ相關関係節があるので、本稿で扱った動詞による修飾を「関係節」と呼ぶべきではないと筆者は考える。しかし、この点については今後の研究に俟たねばならない。

略号

1	1st person	GEN	genitive	O	object
1-2	1st and/or 2nd person	GT	general tense	OBLG	obligation
2	2nd person	INF	infinitive	PF	perfect
ATTR	attributive	INS	instrumental	PL	plural
COP	copular verb	LOC	locative	PR	present
DAT	Dative	LV	linking vowel	PSN	personal name
EMPH	Emphatic	MDL	middle voice	PT	past
FUT	future	NEG	negative	S	subject

参考文献

- Dixon, R. M. W. (2004). "Adjective Classes in Typological Perspective." In Dixon and Aikhenvald 2004, chap. 1, pp. 1–49.
- Dixon, R. M. W. and Aikhenvald, A. Y. (eds.) (2004). *Adjective Classes: A Cross-linguistic Typology*. Explorations in Linguistic Typology 1. Oxford: Oxford University Press.
- Hajek, J. (2004). "Adjective Classes: What can we Conclude?" In Dixon and Aikhenvald 2004, chap. 15, pp. 348–61.
- LaPolla, R. J. and Huang, C. (2004). "Adjective in Qiang." In Dixon and Aikhenvald 2004, chap. 13, pp. 306–22.
- Sharma, D. D. (1988). *A Descriptive Grammar of Kinnauri*. Studies in Tibeto-Himalayan Languages 1. Delhi: Mittal Publications.
- 高橋慶治 (2010). 「キナウル語 (パンギ方言) の格形式と複合後置詞」澤田英夫 (編), 『チベット＝ビルマ系言語の文法現象1：格とその周辺』, pp. 127–152. 東京：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- Takahashi, Y. (2012). "On a suffix of middle voice in Kinnauri (Pangi dialect)." In Nakamura, W. and Kikusawa, R. (eds.), *Objectivization and Subjectivization: A Typological of Voice Systems*, Senri Ethnological Studies 77: 157–75. Osaka: National Museum of Ethnology.
- 高橋慶治 (2012). 「キナウル語 (パンギ方言) の時制接辞について」『地球研言語記述論集』4: 1–12.
- 高橋慶治 (準備中). 「キナウル語動詞の非定形について」
- 安井稔・秋山怜・中村捷 (1976). 『形容詞』現代の英文法第7巻. 東京：研究社出版. 1989⁵.